

新たに編成されたのが第七師団の前身となる臨時第七師団。出身地や入植地が異なる屯田兵たちを、一堂に集めた混成部隊であった。

北海道はこの動員により、戦争ムードが一挙に高まった。師団の集結地となった札幌は、兵と軍馬で賑わう軍隊の街と化し、沈んでいた経済も上向いてきた。

### 帰還兵を熱烈に歓迎

その後、臨時第七師団は東京に移動し、そこで待機しながら出勤命令を待った。師団長は屯田兵司令官・永山武四郎。彼の指揮の下、屯田兵たちは弱卒といわれぬよう訓練に励んだ。道民も我が郷土の兵士たちの動向に注目し、地元の新聞もその動きをしばしば大きく報じていた。屯田兵の士気は大いに上がった。

しかし、四月に講和条約(下関条約)が締結され、出征する前に戦争が終了。戦地

に赴くことなく、五月末に北海道に帰還することとなった。

「道民諸君に告ぐ、凱旋門起こすべし、紅旭旗翻すべし、歓迎宴開くべし」(明治二十八年五月十八日『小樽新聞』)。

屯田兵の帰還歓迎の呼びかけは、出征時以上に熱気を帯びたものとなり、帰還兵たちは道内各地で思いもかけぬ熱烈歓迎を受けた。

### 戦争景気

日清戦争前の日本の財政支出は約八千万円であったが、戦争の勃発で約二億円の軍事支出が生じ、膨大な金が国内に流れた。戦争の勝利による清国からの賠償金も政府に入り、国内経済は一気に膨張。北海道の経済もその恩恵に浴した。

札幌麦酒株式会社などは、戦勝祝勝会によって在庫のビールが一掃され、かつてない好景気となり、戦争前には一〇万円だった

# 仮墓標が石碑へと変化し、 札幌初の史誌『札幌沿革史』が 出版されるなど、戦争により 郷土意識が萌芽した。



札幌史学会が発行した『札幌沿革史全』(札幌市公文書館所蔵)

た資本金を三〇万円に増資。設備を拡張し、生産高を明治二十八年の千七百石から翌年には四千二百石まで伸ばした。

事業への意欲も高まり、札幌では戦争後に北海道木材会社、札幌精米会社、魚卸会社、北海道牧畜会社、北海道介立会社、後藤合名会社、札幌酒造合名会社などが新たに看板を掲げた。

### 芽生えた郷土愛

北海道民は移住当時、互いに出身地が違い、言葉・着物・生活習慣などもことごとく異なっていたため、一体感も郷土愛も少なく、自分が一番と信じていた。しかし、日清戦争後には連帯感が生まれ、徐々に同質化されていった。

札幌では新年名刺交換会という新しい習慣が生まれ、墓地の仮墓標が次第に石碑へと代わっていった。明治三十年には、札幌農学校教授の新渡戸稲造を会長に、河野常吉、永田方正らを会員とする「札幌史学大会」が、札幌最初の史誌『札幌沿革史』を出版した。

これらの出来事は、札幌を郷土と思う人々が定着してきたことを示していた。札幌市民だけではなく、北海道各地に住んでいる人々も、この地に永住する覚悟をし、精神的にも落ち着いた社会を築こうという雰囲気になってきたのだ。

明治二年、わずか二百七人でスタートした札幌は、日清戦争が勃発した四半世紀後の明治二十七年、五千戸二万八千人の住民が住む街となり、北海道も「五十万道民」と呼ばれるほどにまとまりを見せるようになった。北海道民の連帯意識や新しい郷土意識の芽生えをもたらすきっかけとなった戦争、それが屯田兵が出征した日清戦争であった。



札幌駅構内における日清戦争当時の屯田兵輸送情況(札幌市公文書館所蔵『目で見える北海道史』より転載)